

大和大納言(豊臣秀長)ゆかりの地を巡る

来年放送されるNHK大河ドラマ「豊臣兄弟」は天下統一を成し遂げた兄、秀吉を支える弟秀長の姿が描かれます。秀長は晩年大和大納言として郡山城の城主(100万石)を務めました。その郡山における秀長のゆかりの地を巡ります。

【日 時】 令和7年9月21日(日) 10時~15時

(前日17時のNHKの予報で奈良県北部の午前または午後の降水確率60%の場合中止。
中止の場合は、事務局より前日中にメールでお知らせします。)

【集合場所・時間】 近鉄郡山駅東口 10時

【行 程】

近鉄郡山駅 → ①大納言塚 → ②大職冠の楠 → ③大織冠鎌足神社 → ④天守台ビューポイント → ⑤追手門 → ⑥城址会館 → ⑦本丸ビューポイント → ⑧柳澤文庫 → ⑨極楽橋 → ⑩柳澤神社 → ⑪天守台 → ⑫⑬伝羅城門礎石・逆さ地蔵 → ⑭春岳院 → ⑮本家「菊屋」 → ⑯紺屋川・箱本館「紺屋」 → ⑰源九郎稻荷神社 → ⑱洞泉寺 → 近鉄郡山駅



【持ち物】：弁当、飲み物、雨具、名札、保険証

【案内・連絡先】：山下(090-5018-2248) 嶋村(080-1463-8119)

(豊臣秀長)

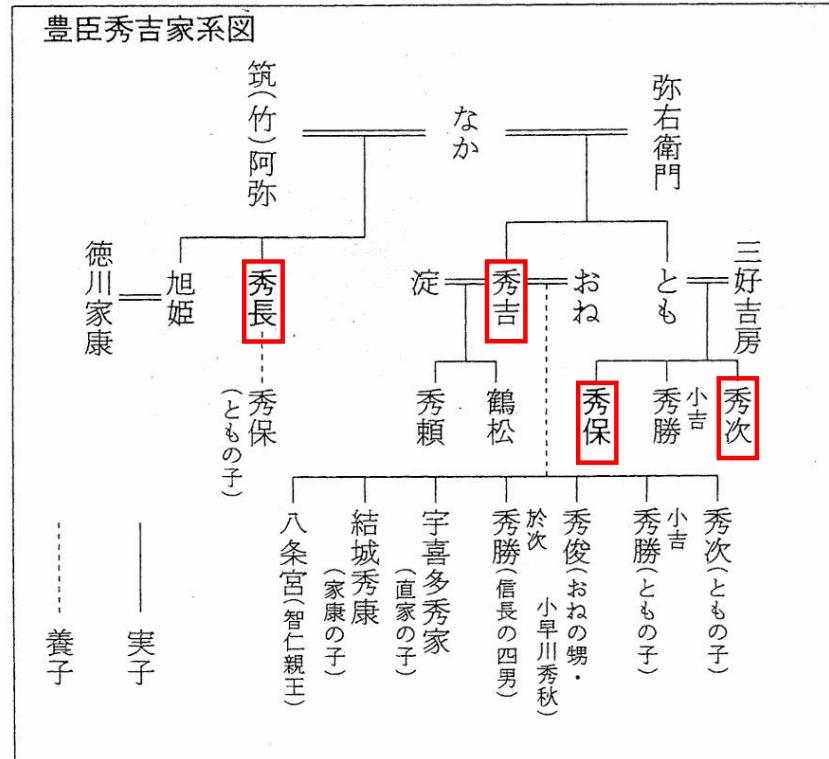
- ・1540(天文9)年に秀吉の3歳年下として尾張国愛知郡中村(現・名古屋市中村区)で生まれる。父は筑(竹)阿弥(秀吉の実父・弥右衛門との説もある)、幼名は「小竹」、後に「小一郎」、「長秀」、「秀長」と称した。
 - ・秀長22歳ころから兄の秀吉に従い、各地を転戦し軍功をあげた。
 - ・本能寺の変後、山崎の戦、賤ヶ岳の戦、小牧・長久手の戦に従軍、紀州征伐で功績をあげ、紀伊・和泉の領主となり、和歌山の地に城を築いた(1585)。1585(天正13)年6月、病気の秀吉に代わり四国攻めの総大将に任命され、長宗我部元親を降伏させた。その功により1585(天正13)年8月大和郡山城主となり百万石を領した。
 - ・1586(天正14)年12月秀吉は九州出兵を発する。秀長は翌年郡山を発し、先鋒として九州に入り、毛利・吉川・小早川らの諸軍を指揮して島津義久の軍と戦った。
 - ・秀長は郡山に入ってから2年後(1587年8月)には大納言に叙せられ、「大和大納言」と称された。
 - ・しかし、郡山入城後わずか6年余りで病死(1591年1月)。葬儀は、大和郡山城中で大徳寺の古溪宗陳(こけいそうちん)が導師をつとめて執り行われ、大納言塚の地に埋葬されました。墓所は兄秀吉が近くに建立した菩提寺の大光院が管理し菩提を弔った。
 - ・豊臣家の滅亡後、秀長の家臣だった藤堂高虎は、大光院を京都の大徳寺に移し、墓地の管理は、位牌を預かる東光寺(現在の春岳院)に託した。
 - ・その後、墓地は荒廃したが、江戸時代に春岳院の住僧栄隆、訓祥、郡山町民の尽力で整備され、五輪塔が建てられた。
 - ・今でも毎年4月22日に市民の手によって大納言祭が開かれている。

(秀吉と秀長)

秀長は秀吉の弟として兄を支え、秀吉に異を唱え制御できる人物であった。また、徳川家康や伊達政宗など外様大名を抱える豊臣政権における調整役であり、政権の安定には欠かせぬ貴重な人物でもあった。秀長がもっと長生きすれば、豊臣政権はもっと長く存続したのかもしれないといわれている。

(秀長の死後)

秀長死後(51歳)、養子の秀保が相続したが1595(文禄4)年17歳で亡くなり秀長の家系は断絶。その後郡山城には増田長盛が入城。増田長盛が改易され大後一時廃城になるが徳川幕府によって改修を受け、譜代大名が歴代城主を務め、柳沢吉里の入封後は柳沢氏が明治維新まで居城とした。



豊臣秀長(大和郡山市教育委員会)

①大納言塚

天正19年(1591)、郡山城内で没した秀長公はここに葬られ、墓所は兄秀吉が近くに建立した菩提寺の大光院が管理し菩提を弔っていた。大坂夏の陣により豊臣家が滅ぶと、秀長公の家臣だった藤堂高虎は大光院が荒廃することを懸念して寺を京都に移し、秀長公の位牌は城下町の春岳院に託した。

(大和郡山市観光協会)

②大織冠の楠

豊臣政権期の天正16年(1588)から天正18年(1590)まで、大織冠・藤原鎌足を祀る多武峰(現在の談山神社)は郡山城の鎮守として、この楠のある丘陵に遷座していました。樹齢500年以上と推定される楠は、秀長公の姿を見ていたのかもしれません。

※郡山多武峰の正確な場所は現在わかりません。

(大和郡山市観光協会)

③大織冠鎌足神社

天正13年(1585)9月、秀長が郡山城に入城後、多武峯談山神社の鎌足公の御神靈を城の西北の地に遷座しました。大織冠宮と呼び城の守護神としてまつり、付近一帯は大織冠と称されました。

天正18年(1590)12月、御神靈は多武峯に帰山され、あらためて御分靈をまつたのが大織冠鎌足神社。創建当時は東の丘陵地にあったのを、郡山城主の柳沢保光が1789(寛政元)年に移転改築したのが今の神社で、靈験あらたかな神として広く崇拝されてきました。

郡山城跡

郡山城跡は、安土桃山時代の野面積み石垣が良好な状態で残る全国でも貴重な城跡で、石垣に寺院の礎石・石仏など多数の転用石材が使われているのが特徴です。天守台からは、奈良盆地を360度見渡せる素晴らしい眺望を楽しめます。また、日本さくら名所100選に選ばれており、毎年春の「お城まつり」には多くの花見客と屋台で賑わいます。

(大和郡山市観光協会)

④天守台ビューポイント

⑤追手門

昭和58年(1983)から昭和62年(1987)に、大和郡山市民の寄付等により追手門、追手東隅櫓、追手向櫓が、秀長公築城当時に近い形で再建されました。

(大和郡山市観光協会)

⑥城址会館

明治41年(1908)奈良公園内に建てられた奈良県最初の県立図書館で、昭和43年(1968)現在地に移築されました。

(大和郡山市観光協会)

⑦本丸ビューポイント

⑧柳澤文庫

江戸時代中期から郡山藩主を勤めた柳澤に家歴代当主の書画・和歌や古文書を所蔵し、郡山城や柳澤家ゆかりの展覧会を開催しています。郡山城の御城印は、ここで購入できます。(大和郡山市観光協会)

⑨極楽橋

本丸を守る内堀に掛けられた橋で、本丸へ登城する正式なルートの橋として重視されてきました。明治初期の廃城令により失われていましたが、令和3年(2021)に再建されました。

(大和郡山市観光協会)

⑩柳澤神社

享保9年(1724)柳澤吉里が郡山に入封し、以降明治維新まで柳澤家の安定した統治が行われました。柳澤神社では、吉里の父柳澤吉保(徳川綱吉側用人)をお祀りしています。 (大和郡山市観光協会)

⑪天守台

郡山城の天守は、近年まで「幻の天守」とも言われてきましたが、平成26年(2014)の発掘調査で礎石が確認され、豊臣政権期には四層から五層の天守があったと考えられています。 (大和郡山市観光協会)

⑫⑬伝羅城門礎石・逆さ地蔵

郡山城の石垣には、非常に多くの「転用石材」が使用されており、天守台の北東裾には、「伝羅城門礎石」と「逆さ地蔵」があります。 (大和郡山市観光協会)

⑭春岳院

城下町にある秀長公の菩提寺です。当初の菩提寺である大光院が京都に移された後、郡山において位牌と墓所(大納言塚)の管理を託されました。秀長公が策定した郡山城下の商工業者特権(箱本制度)は、江戸時代にも引き継がれたため、春岳院は町人から篤い信仰を集めました。秀長公の肖像画や箱本制度史料も伝わります。 (大和郡山市観光協会)

⑮本家「菊屋」

創業400余年 秀吉公をもてなすお茶会にひとくちサイズの餅菓子(現城之口餅)を献上したという老舗。現在の建物は嘉永の大地震(1854年)で倒壊した後、1855年に再建されました。

(本家「菊屋」HP、大和郡山市観光協会)

⑯紺屋町・箱本館「紺屋」

秀長公の特許状(独占営業権)によって奈良盆地の藍染は江戸時代を通して大和郡山の紺屋町でしか営業できませんでした。

箱本館「紺屋」は、江戸時代中期に作られた藍染商の町家を再生した観光施設で、館内には、「箱本十三町」関連資料、金魚ゆかりの美術工芸品「金魚コレクション」、セルフカフェ、藍染ショップ、藍染体験工房などがあります。 (大和郡山市観光協会)

箱本十三町とは

秀長公は、城下の東南に有力な商工業者を集め、地子(土地にかかる税金)を免除し、自治権や独占営業権を与えて、強力な城下町振興を行いました。これらの町は、「箱本十三町」と呼ばれ、江戸時代の郡山藩主にも受け継がれました。 (大和郡山市観光協会)

⑰源九郎稻荷神社

歌舞伎・文楽の「義経千本桜」に登場する「源九郎狐」を祀る神社。秀長公と親交のあった長安寺村の僧宝誉の夢枕に白狐が老翁の姿となって現れて郡山城の守護神となることを告げ、宝誉からそれを聞いた秀長公が鎮守として城内に祀ったと伝えられます。

その後、江戸時代中頃の享保4年(1719)に現在の洞泉寺町に遷座しました。 (大和郡山市観光協会)

⑱洞泉寺

洞泉寺は、秀長公が建立した寺で寺号は三河拳母郡(愛知県豊田市)の洞泉寺から移されました。御本尊は鎌倉時代の快慶作と伝わる阿弥陀三尊立像です。境内には光明皇后が民衆の病気平癒のために作らせたと伝わる「垢かき湯船」と「垢かき地蔵」があります。

(市制70周年記念 城下町の寺社巡り)